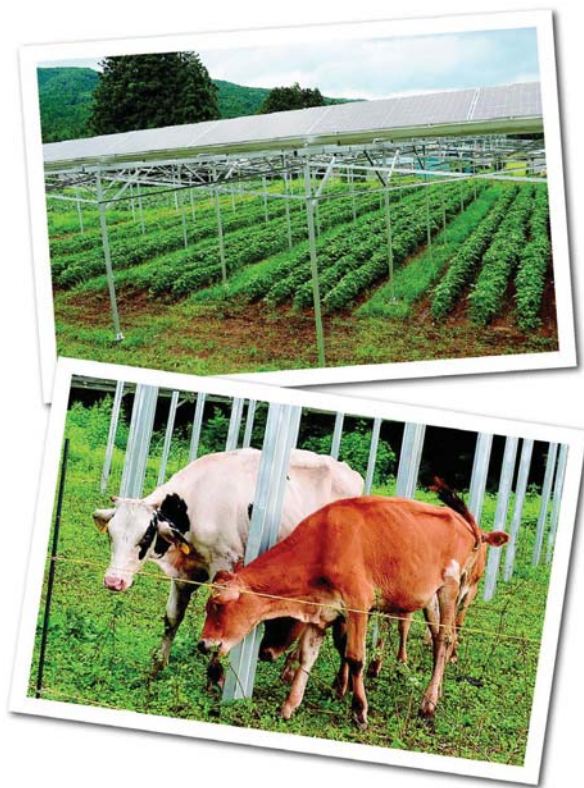


特集 すいよう

広大な農地の上部に設置された二本松営農ソーラーの太陽光発電設備＝福島県二本松市（近藤恵さん提供）



農地で発電も作物も



●太陽光パネルの下で、佐々木さんが栽培しているダイズの畑＝福島県●近藤さんは太陽光パネルの下で牛を放牧し、牧草を食わせています＝福島県二本松市



太陽光パネルの下で佐々木さんが育てているダイズ

東京電力福島第一原発事故（2011年）から13年半。福島県では、地元の農家たちが農業と発電を両立させる営農型太陽光発電事業（ソーラーシェアリング）に取り組み「エネルギーの自立」を目指しています。福島県と二本松市の現場を訪ねました。（山本健二）

福島市内を流れる荒川（阿武隈川水系）のほとりにある段々畑の一角。福島県農林連は今年1月、この一部である13ヘクタール（300平方メートル）の土地に140枚の太陽光パネルを設置する発電所を設けました。パネルの下では、県農林連事務局長の佐々木健洋さんが有機ダイズを育てています。

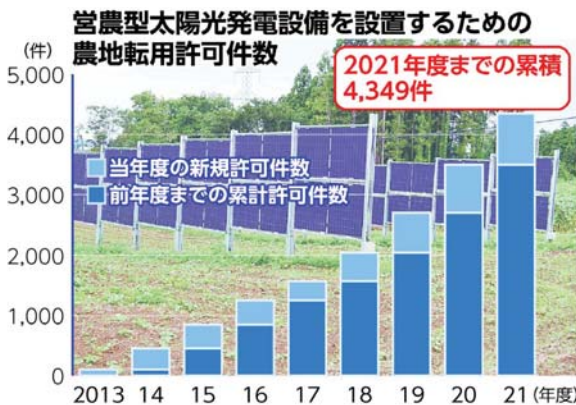
もとは木が生い茂る耕作放棄地。佐々木さんが購入し、膨大な数の石を拾って開墾しました。ダイズは多少の日陰

でも生育に影響の少ない作物で、パネルの下で育てるのに適しています。既に花が付き始め、11月中旬頃の収穫を目指します。

2月には太陽光の売電を開始。年間約100万円の売電収入を見込んでいます。「誰にも見向きもされなかった土地が、農業と発電の両方に生かされる。新しいスタイルです」（佐々木さん）。県農林連は来年にかけ、さらに市内2カ所に小規模発電所を新設する計画です。

福島県の農家挑戦

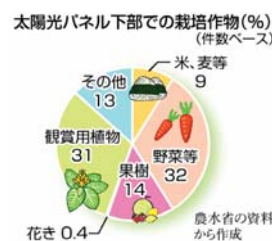
原発の代案ここにある



政府への補助金拡充の要望など、自分たちの事業を発展させるために力を合わせている佐々木さんと近藤さん。営農型発電にまい進する思いの背景には、忌まわしい原発事故があります。

当時、営んでいた有機農業をやめざるを得なかった近藤さんは「原発の代案となるエ

再エネは世界の流れ



（近藤さん）

昨年の発電実績は360万キロワット時。協定を締結する二本松市の家庭電力の5%を賄える規模です。多い年には50の団体が視察に来ました。将来的には、蓄電池の大規模活用を目指しています。「遊びに来た人が電気自動車に充電して、ブドウ狩りを楽しんで帰るというイメージですね」

営農型発電は、農地の上部に間隔を空けて太陽光パネルを設置し、作物とパネルで太陽光を共有（シェア）して農業と発電を両立させる仕組みです。売電で得る利益は、農家の持続的な経営を助けます。

二本松市の広大な農地には、9500枚の太陽光パネルが設置されています。広さは6畝（6万平方メートル）で東京ドーム1・2個分。営農型発電に取り組み「二本松営農ソーラー」の事業です。

同社は19年、近藤恵さんが代表を務める「二本松営農型エネルギーをみんなで考える株式会社（ゴチカン）」が地元生協、NPO団体と共同出資して設立。荒れ果てた水田

の石拾いから始め、現在は社員3人で農場を管理しています。

パネルの下で育てる作物はブドウ、エゴマ、ダイズなど。牧草を育てる肉牛の放牧もしています。温暖化によりブドウの着色不良などが多発していますが、近藤さんの農場で育てる巨峰など生食用ブドウの着色は良好。「パネルが強すぎる光から作物を守ったり、霜が降りるのを防いだりするメリットがあります。耕作放棄地を復活させ、山を削ることなく再生可能エネルギーを生産できます」と胸を張ります。

強すぎる光から守る



太陽光パネルの下でブドウなどの栽培に取り組む近藤さん＝福島県二本松市